



2007年

SORA 18号

晴夜 (18) | 2 柴田 佐知子

佐谷・御開帳五句

をちこちの僧をあつめて春祭

谷に秘す観音像や山桜

御開帳法螺貝吹くは女ばかり

鶏を殺めて谷の春祭

つぎつぎに燭足し拝す御開帳

熱湯を噴き出す大地黄沙来る

列島が桜の中を曲がりけり

玄海の紺に流るる花吹雪

目も口も忘じし雛を流しけり

貝殻骨

服部 早苗

幼子の貝殻骨も春めけり

末黒野のなかにひとすぢ道らしき

毒草も毒消し草も春の山

朧夜の鴟尾の中なる心柱

春泥を来る醍醐寺の僧の列

楊貴妃桜の下に群れゐる男たち



菜の花を撮つてゆきたる観光課

県庁の廊下小暗し桜草

橋の名で道教へらる糸桜

花吹雪崖にあたれば渦巻いて

甘茶かかりし指先をもてあます

バスに道ゆづられてゐる花の山

遠足の列に鸚鵡の叫びどほし

酔つてゐる牧水の字のあたたかし

桐の花川さかのぼる舟の絶え

百千鳥

樋口みのぶ

一軒に表札ふたつ小鳥来る

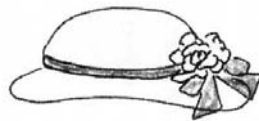
君抜けし焚火にとどく波の音

人逝けば花に飾られ春の闇

光源氏写楽羽衣椿の名

落椿土のよごれのなかりけり

青空へ漕ぎ出す舟や雛まつり



結論の出るまでのばす花見かな

真心はこころで応へ白椿

車窓より犬が貌出す桜かな

花冷や造酒屋の犬老いて

ひと筋の雲はすぐ散る仏生会

野に立てば我も蝶なり吹かれをり

よく噛んで食べる雑穀春惜しむ

薫風に押されて父の墓前まで

墓山に細る束子や百千鳥

桃の花

青山 悠

鐘撞いて山寺の春深うせり

開帳や細身に在す観世音

霾や兵火のがれし観世音

花車ひく少女らに雨上る

あめんぼをしばらく乗せて花筏

猪解き場ありしはこころ花は葉に



春大根供へてありぬ地藏堂

蟻急ぐ行く手に幸のあるやうに

白鷺に蹤かれ鋤き込むげんげん田

新茶摘む課外授業の小学生

おほかたは土着の村や桃の花

齒朶若葉底の見えざる車井戸

玉石の話をよそに春炬燵

仏にも告げ口をする華鬘草

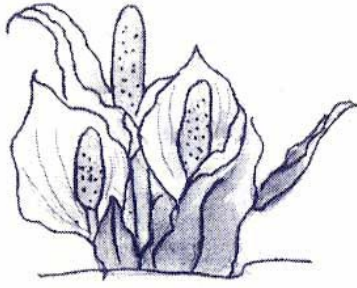
果実酒のほのかな酔も春の宵

空作品抄

柴田佐知子抽出

青々と山の座れる筑後川
募金箱コトリ銀座の夜のみどり
眼の力抜けば涙や花貝母
毒草も毒消し草も春の山
墓山に細る束子や百千鳥
霾や兵火のがれし観世音
開帳の釜も一年振りに出て
せつかちな父見失ふ苗木市
魚屋が持つていきなと海酸漿
よく笑ひよく走る子や入学す
霾や足腰弱き友ばかり
探梅や寺の歴史の長々し
洞の間に落ち込む蛸や彼岸西風
うしろから押され押されて春の川
あぢさゐは怪しきものよ夢に似て
さやさやと動く日の斑やまむし草
ことのほか首塚くるむ牡丹雪
曳き売の魚に混じる露の束
亡き母とともに雛を飾りけり

高倉和子
中田みなみ
荒井千佐代
服部早苗
樋口みのぶ
青山 悠
秋 千晴
あさなが捷
小林朱夏
苑 実耶
高倉恵美子
野畑小百合
吉村摂護
田島洋子
星原悦子
上村和子
堀江恵子
桜三奈子
青木朋子



普段着で花の野点の座に混る
あたたかや膝にをさまる琵琶の形
朧夜や廻り廊下の古硝子
花曇り読経の声の尾をひきて
過疎となるふるさと北風が押すばかり
クローバーどのおかずから食べようか
花過のへりコプターが空壊す
青春の割れ目に吹ける石鹼玉
連載の終り見えくるさくら冷え
牡丹のひらきて深き息をせり
降りそめは細き光や春の雨
しめ鯖の青き皮はぐ雪明り
眼かくしをされてうれしき遠花火
立ち止まり身を反らしたる山の蟻
辛夷咲く空の青さを今更に
覗きこむ牡丹の中に母の笑み
夏空に翼大きく広げたし
あたたかや主治医に母がほめられて
眠りたくなれば眠りて春の果

安武 晨子
矢野 百合子
大地 真理
ふじの 茜
石川 叔子
今井 春生
田代 貞枝
及川 木栄子
小川 涼
永原 朱
遠山 のり子
川村 多美子
岸 千手
犬丸 勝子
森 裕子
山本 美穂
川崎 よしみ
山崎 千恵子
神谷 耕輔